重度自閉症男児への視覚支援に関する研究

その2. PECS の訓練が共同注意関連行動に及ぼす影響

○永井祐也・金澤忠博・日野林俊彦

(大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：重度自閉症 PECS 共同注意関連行動

A Case Study on Visual Supports for a Boy with Severe Autism: 2. Effect of PECS Training on Joint Attention Related Behaviors.

Yuuya NAGAI, Tadahiro KANAZAWA, and Toshihiko HINOYASHI

(¹Graduate School of Human Sciences Osaka University)

Key Words: severe autism, PECS training, joint attention related behaviors

目 的

本研究では、PECS による訓練が、重度の自閉症児のコミュニケーション時の視線行動や指さしなど共同注意関連行動の発達に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

方 法

研究協力者：一連発表の金澤・永井(2012)と同じ。

手続き：7歳10ヶ月～8歳5ヶ月までの7ヶ月間に及ぶ隔週の療育において、PECSのフェイズⅣの訓練開始以降の個別療育中の様子を室内に設置した2台の固定ビデオカメラを通して記録した。PECSでは対象児のほかに、コミュニケーションの相手となるパートナー(CP)と対象児が正しいコミュニケーションができるように修正の指導を行うプロンプターの2人で訓練を行う。フェイズⅣの訓練では、要求したいアイテムカードと「ください」カードをセンテンス・ストリップに貼りつけて「○○ください」という2語文の形で要求することが訓練の目標である。CPは机を挟んで対象児から見て右に90度の位置に座り、プロンプターは対象児の背後に座るようにした。絵カードを正しくセンテンス・ストリップに貼り付けてCPに渡した場合を正反応とし、セッション毎の正反応率を調べると共に、PECS訓練中(おやつ場面)の対象児の行動とCPやプロンプターとの相互作用を記述し分析した。具体的には、センテンス・ストリップと好子の交換、好子受取り時の視線の方向(CPの顔、CPの手(or センテンスストリップ)、好子、その他)などに着目して観察・記録した。他に、自由遊び場面の自発的なコミュニケーション行動についても観察した。

結 果

【標的行動の獲得】 対象児の反応はPECSトレーニングマニュアルに従って分類した。フェイズⅣのセッション数は12セッションで全117試行であった。1セッションあたり9～10施行であった。1～6セッションはあらかじめセンテンス・ストリップの右側に貼ってある「ください」カードの左に好子のカードを貼ってCPに渡す訓練を行い、7～12セッションは好子カードと「ください」カードをセンテンス・ストリップに貼りCPに渡す指導を行った。

フェイズⅣの「ください」カードをあらかじめ貼ってあるセッション(全6セッション)では、段階的に自発正反応率が0%から100%になった。好子カードと「ください」カードをセンテンス・ストリップに貼るセッション(全6セッション)では、自発正反応率が平均80%であった。

【訓練場面におけるコミュニケーション時の視線方向】 絵カード交換時にはCPの手(or センテンスストリップ)や好子を見ながら渡すことが全試行数の70%以上であったが、手渡

しながら全く関係のない方向を見ていることもあった。CPの顔を見て絵カードを交換したのはわずか3試行(2%)であった。また、絵カードの交換後、好子を受け取る際には、好子を見ていることが80%以上であり、CPの顔を見たのはわずか1試行のみ(1%)であった。

【自由遊び場面における質的な変化】 自由遊び場面で、欲しいものに対して指さしする行動が見られた。また、自分がスケッチブックに描いた絵を指さす行動も見られた。これらの指さしは本研究を始める以前には全く見られなかった。

考 察

【訓練場面におけるコミュニケーション時の視線方向】 本研究の対象児は絵カードの交換の際に、好子を見るよりもCPの手を見ることが明らかになった。対象児はもともと好子しか見ていなかったのが、PECSの訓練によって、「絵カードをCPに渡せば好子がもらえる」と学習した結果、CPの手に注目する頻度が多くなったと考えられる。

また、対象児はCPの顔を見ることは極めて少なく、PECSによる絵カード交換時にアイコンタクトがほとんど成立していないことも明らかになった。これはPECSの指導によってアイコンタクトが生成されたという先行研究(Charlop-Christy, Carpenter, Le, LeBlanc & Kellet, 2002; 若杉・藤野, 2009)と反する結果であった。但し、加藤・宮崎・井上(2008)は、無発語の自閉症幼児3名のうち1名はアイコンタクトが生起したが、残り2名は生起しなかったと報告した。ところで、これらの先行研究ではアイコンタクトの生起に関わる要因については分析されていない。本研究のPECSの訓練を振り返ると、対象児が自発的にコミュニケーションできたときにCPが褒めるなどの人的好子がほとんどなかった。今後は積極的に人的好子を導入しアイコンタクトに与える効果を検証することも課題と考える。

【自由遊び場面における質的变化】 本研究の対象児はフェイズⅣの指導開始以降、自由遊び場面においてそれまで観察されなかった指さしの生起が確認された。Yoder & Liberman (2010)はPECSの訓練によって共同注意が増加することをEarly Social Communication Scales (Mundy, 2003)による構造化された場面でのアセスメントによって明らかにしている。本研究の結果はPECSの訓練によって構造化された場面ではなく、自由遊び場面において共同注意関連行動が生起したことを報告した点で目新しい。今後はPECSによって共同注意関連行動が日常生活場面に般化するのかを明らかにすべきと考えられる。